長洲町立長洲小学校　校長便り　No.３５

みんなの居場所

令和４年９月２６日(月)

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

偉人の言葉に学ぶ

私は普段の生活の中でよく読書をするのですが、その中に多くの学びがあります。自分の生活と重ね合わせて読むので、その時その時で感じ方も違い、だから読書はやめられないのだと思います。

先日、有名な画家、ピカソの言葉に共感しました。

「できると思えばできる。できないと思えばできない。これはゆるぎない絶対的な法則である。」

みなさん、如何ですか？　私は普段の生活と重ね合わせて非常に納得できました。私はよくこう言います。

「できない理由を考えるのではなく、どうしたらできるかを考えよう。」

新しいことに挑戦することは、それ相応のストレスやプレッシャーを感じるものですが、それをできない理由にするのは如何なものでしょう。それは仕事に対する真摯さがないことだと思います。今行っていることが正しいやり方なのか？時代にあっているのだろうか？と常に考えることが重要です。教師は新しい時代の流れに即応しないといけません。流れに乗っていくためにも、変化を厭わず挑戦する気持ちを持ち続けたいものです。

「主体性について思う」その①

２０２０年度に完全実施（小学校）された学習指導要領の中で、「主体的・対話的で深い学び」が目玉となっていますが、これって一体どんな学びなのでしょう。私見を述べてみたいと思います。

これからの世の中、先が見えない変化し続ける社会です。そんな社会で子供達が活躍するために重要視されているのが「主体性」、すなわち、「進んで〇〇する」ということですね。とは言うものの…。

これまで教育現場は、「学んだことを理解できているか」ということをテストの点数等で評価してきました。「知識・理解」に重点があった訳です。これからの社会は「習得した知識をもとに自分で考え、表現したり判断したり行動したりすることができる」人材を求めていて、学校でも評価の対象をシフトしていく必要性が出てきました。いわゆる「アウトプット」が重要視されるようになってきているのです。急速なＩＴ化の影響で、１０～２０年後には今ある職業の４９％が機械に代替される可能性があるといわれています。更に、グローバル化の影響で、約３０％の企業が外国人留学生を採用するとか!?

この様な現状から、変化の激しい社会の中で子供達が生き抜くためには、主体性が必要なのです。社会で求められている主体性とは、「自分で考え、判断し、責任をもって行動する」力。知識・理解にとどまらず、「得た知識を生かして何ができるのか、世界や社会とどのように関わっていくのか」、という考え方までを身につける必要があります。でも、「主体性を身につけさせる」って何をやればいいのか!?　私達教師も悩むのですから、保護者の方もどうすれば良いか悩みますよね。私自身はこれまでどうしてきたかということを綴ってみます。

①「過干渉はしない」

まず、子供の主体性を育てるうえで避けたいのが「過干渉」です。私もそうでした。母親から「勉強しなさい！」と言われて「今やろうと思っていたのに…やる気なくした！」と屁理屈、その後、げんこつを食らうという日々でした。朝起きた子供に「顔は洗った？」「早くご飯食べて」「ハンカチ持った？」、学校から帰宅した子供には「手を洗った？」「おやつ出しておいたよ」「早く宿題して」。つい細かく声をかけたくなるのが親心かもしれません。ところが、大人が子供に干渉しすぎると、子供は次第に自分で物事を考えたり、判断したりすることが少なくなってきます。「言われたものを用意しよう」「言われてからやろう」という受動的な思考に落ち着いてしまうのです。ある程度は子供の主体性に任せると共に、「学校で叱られても本人の責任」と思うことも大切です。将来責任転嫁するようになってしまっては、私たち保護者も困ってしまいますからね。（その②につづく）

シリーズ「自分を語る」#35

入院2日目、背椎造影検査を受けることになりました。簡単に言っていますが、この検査は脊柱管に造影剤を入れてしントゲンを撮るもので、献血と同じくらいの太さの針を、体をエビのように折り曲げた状態で腰から刺します。これが痛いのなんのって…。検査結果は「完璧なヘルニア」でした。それでも、何とかならんかなぁ、と主治医に聞くと、「ブロック注射という方法があります。」それに最後の望みを託しました。1回目、何となく痛みが治まりました。この調子で痛みがなくなればと思っていましたが、そう簡単には行きません。痛みが強くなり始め、2回目、3回目…。そして、ある日の朝、仰向けで寝ていた状態でクシャミをしたところ、これまで経験したことのない激痛が体を襲いました。立つことすらできません。どんな格好をしても痛みが継続している状態です。とうとう、私は当時手術設備の完備していた、熊本整形外科病院に転院することになりました。這うように義妹の車に乗り痛みを必死にこらえ移動しました。熊本整形外科病院では、私の痛がりようが普通ではないことに気が付き、すぐに座薬の痛み止めと、注射による痛み止めを打ってくださいました。後になって聞いたのですが、この注射は麻酔の一種で、使い方を間違うと中毒症状を引き起こすものだそうです。いわゆるドラッグのようなものだったのでしょうか。この時点で、私は手術を決意しました。

手術を決意した時点で、そこまで腰が悪くなっていったことについて、自分なりに考えてみました。先ず初めに思い付いたのは高校時代のことです。ぎっくり腰のような症状で高校の近くにあった整形外科で、痛み止めの筋肉注射をしていたことを覚えています。この時点で注意していればよかったのかもしれませんね。私は真逆の方向へと進んでいきます。大学時代、少林寺拳法部では今の運動部活動とは真逆の、しごき、がありました。また、もともと体が硬く、激しい運動や柔軟性が求められる運動には向いていなかったのかもしれません。それを、敢えて腰に悪いものばかりを選び活動していたのですから、腰が悲鳴を上げていたのかもしれません。就職し、黒石原養護学校では自分よりも体重の重い子供達を車椅子から無理な体勢で抱えたり、更には職員体育でバドミントンにのめり込み、これで完全にヘルニアにまっしぐら状態になったようです。　（つづく）

※　「みんなの居場所」に関するご意見ご感想をお寄せください。（「みんなの居場所」への掲載の　可　・　不可　）